

# Wakako Yamauchi の短篇 “Songs My Mother Taught Me” と “And the Soul Shall Dance” ——母の歌, 命の歌

渡 部 知 美

日系アメリカ人二世作家 Wakako Yamauchi の作品集 *Songs My Mother Taught Me* (1994) に収められた短篇や戯曲について、Amy Ling は次のように述べている。

Yamauchi's themes—love unconsummated, opportunities missed, 'songs of longing' and resignation, of restraint and its psychic cost, of despair and renewal of hope—are handled with consummate skill, presented with beauty and grace. . . . They are predominantly rooted in a particular people, a time and a place: the experience of Japanese American farmers in the 1930s in the Imperial Valley of California, but their resonance and significance extend—as with all lasting literature—to all people, everywhere. (Hongo 6)

実を結ぶことなく終わった愛、逃したチャンス、憧れや諦めの歌、束縛とその心理的代償の歌、絶望と希望の蘇りの歌といったテーマが、洗練された技巧で表現されていることを指摘している。Imperial Valley は、メキシコとの国境に近い California 州南東部にあり、1930年代にこの地で農業を営む日本からの移民の生が描かれている。

中国人排斥法が成立した2年後、1884に日本人を受け入れる移民法が合法化されている。長男になにかあった場合のスペアでしかない次男、三男、徴兵制を逃れたい男達が、故郷に錦を飾る夢を抱いて移住している。一方、日清戦争、日露戦争における日本の勝利は、黄禍論を煽り、アメリカで排日感情が高まっていく。California 州では、Alien Land Law (外国人土地法) 等の排日的法律により、日本人の土地所有は禁止される。こうして、農業に従事する日本人は、2, 3年おきに移住をしては土地を借りる小作人に転落していく。

異郷で人種差別に耐えながら生きていた日本人移民の、心の襷に隠された感情を捉え、Yamauchi は、読者の感情に訴える文体で表現している。本論では、本作品集に収められた短篇 “Songs My Mother Taught Me” と “And the Soul Shall Dance” を中心に、母と娘の関係について考察をする。

## I

“Songs My Mother Taught Me” も “And the Soul Shall Dance” も、少女の時に目撃したことを語る大人になった日系アメリカ人二世である娘の視点を設定している。

日本で生まれ育ち、日本の教育を受けた一世とは異なり、二世は、アメリカで生まれ、家では両親と日本語で会話をし、日本の習慣や伝統的価値観を教わっている。一方、学校では、英語で教育を受け、アメリカの価値観も学んでいる。アメリカは血縁主義ではなく地縁主義を採るので、二世は市民権を取得できる。アメリカ社会における位置付け、文化的影響、アイデンティティ意識という点において、一世と二世は大きく異なっている。

“Songs My Mother Taught Me” の語り手 Sachiko Kato の父は、故郷に錦を飾るという夢を持って、黙々と働く物静かな男である。Imperial Valley は Colorado 砂漠にある谷で、ほとんどが海面下の低地である。冬には雨で畑が水浸しになることもある。5月になると “broiling sun” (32) が照り始め、乾燥した酷暑の日々となる。農地には適さない土地、過酷な気候、天候に左右される収穫高。日本人農民は、移住を繰り返しながらこういう土地へ追いやられていったのである。故国へ帰るといふ夢があるから、父は寡黙に重労働に耐えているのである。

一方、母 Hatsue は、三人の子供がある程度大きくなり、手が離れ、日本への郷愁に浸るようになる。

My mother spoke often of returning to Japan, of smelling again the piney woods, tasting the exquisite fruits, of seeing her beloved sisters. The stories of her Japan came on like a flashback in the movies—misty, wavering, ethereal, and her beautiful eyes would grow soft. (33)

心にできた隙間を通して、故国への思いが膨らんでいったのである。緑なす山

河、四季の移り変わりを映す木々や花々の香りと果物の味、一緒に遊んだり喧嘩をした姉妹に思いを馳せている。日本人と知り合ってもお互い、別の場所に移住せざるを得ない。卑小な雑草や低木が点在するのみの砂漠の光景は、視覚的ストレスを引き起こすのみならず、そこで内的感情生活も殺伐としているのである。「この世のものでないような」(“ethereal”)という表現は、母の中で日本が美化されているだけでなく、Sachikoも彼女なりにその美化された日本という国を想像していると感じられる。

言葉や渡航費の問題もあり、男達は写真結婚に頼らざるを得なかった。親族に花嫁候補を探してもらい、手紙や写真を交換するだけで結婚を決めるというものである。これに関して、池野みさおは、次のように述べている。

日本領事館が設けた厳しい経済的基準のために、1915年以前は労働者たちが写真花嫁を呼び寄せることは事実上不可能だったが、1915年になると800ドルの預金を持っているすべての男性に妻を呼び寄せる資格が与えられた。しかし、経済的な条件以外にも、妻はパスポート申請前に6ヶ月以上夫の戸籍に入っていなければならない、妻は夫より13歳以上若くてはならない、などの規定があった。(池野 204)

移民男性達は、妻を迎えるのに必要なお金を貯めるのに長い年月を要し、花嫁候補よりずっと高齢だった。結婚するために、若い時の写真や修正写真を送る者もいた。アメリカに上陸して、夫を見て愕然とし、駆け落ちや離婚に至るケースもあった。

Hatsueも写真花嫁であると考えられる。年上の友達 Sayo に指摘されて、Sachikoは母の様子がおかしいことに気付く。母は、“Mujo No Tsuki”という日本の曲を蓄音機で繰り返し聴いているのである。太平洋を見ながら“it was hard to believe these same waters broke on the shores of Japan”(33)と言ったHatsueは、歌詞にある“Hama chidori”(34)になって日本へ飛んで帰りたいのだと感じられる。Sayoの“Why is she so sad?”(34)という問いかけは、Sachikoが母の心理状態に関心を抱く契機になったと捉えられる。

収穫の手伝いに雇われたKibeiのYamadaと父、そして彼に対する両親の態度の違いを、Sachikoは敏感に感じ取っている。Kibeiは、アメリカで生まれ、日本で教育を受けた後、帰ってきた日系アメリカ人二世であり、Yamadaは父

よりずっと若い。寡黙に働き続ける父は、櫛で髪をとくことすらしない。一方、Yamada はハンサムで、夕食を食べに来る時は、新品のワイシャツを着、ポマードで髪をとかしている。

Yamada-san had eyes that looked at you. When you talked, he committed himself to you. My father's eyes were squinty from the sun, and he hardly saw or heard you.

My father had been dissatisfied with Yamada-san. For a man of few words, I was surprised how strongly he spoke. (35)

Yamada は、日本の礼儀作法を身に付けているのである。マンドリンを弾き、音楽を奏でることで生を楽しむ精神的余裕も持っている。“Like a woman!” (35) だと彼をけなした父の語気の強さに驚いたことを記憶している Sachiko は、その理由を洞察している。

He had a quality of the Orient my father did not have. He was the affirmation of my mother's Japan—the haunting flutes, the cherry blossoms, the poetry, the fatalism. My mother changed when he was around. Her smile was softer, her voice more gentle. I suspect this was what my father disliked more than the man himself—the change he brought over the rest of us. (35)

折り目正しくきっぱりとしているというだけでなく、人の心を和ませる音楽を奏でられるという点から、Yamada に桜の花や笛の音、詩や宿命論という日本的感性を重ね合わせ、母は彼に惹かれていたということが分かるのである。父の語気の強さは、男としての彼への嫉妬を意味していると理解している。

Hatsue が生んだ赤ん坊の父親は Yamada であり、Sachiko もそう推察していると考えられる。Stan Yogi は、“Trying to cope with unfulfilled dreams and filling a void she feels for her homeland, she takes Yamada, a physical reminder of Japan, as a lover” (Yogi 138) と指摘している。しかし、母は妊娠を喜ばず、生まれた赤ん坊 Kenji の世話もいとわしく思っており、そのことを Sachiko は感じ取るから母親のように世話をする。Hatsue が Kenji の額に鈍の刃を当てるのを見て泣きわめく Sachiko に母は、“My children are all grown. I didn't want this baby—I didn't

want this baby . . .” (38)と言う。母を他者化し、侮蔑に値する人と Sachiko が思っても不思議ではない言葉である。しかし、彼女は母の苦悩に理解を示している。

I know now what she meant: that time was passing her by, that with the new baby she was irrevocably bound to this futile life, that dreams of returning to Japan were shattered, that through the eyes of a younger man she had glimpsed what might have been, could never and would never be. (38)

日本人農民は、“a cycle of poverty and hard work” (Yogi 136)に捉えられていたのである。子供がひとり生まれる度に、故国へ帰る夢が遠退くのを感じざるを得なかったのである。

Kenjiの死は、Hatsueが彼のことをいとわしく思っていたからこそ、起ったのだと考えられる。取り乱して“I left him only a minute, and I found him face down in the water! I’ve killed him, forgive me, I’ve killed him!” (39)と泣く Hatsueは、“maternal responsibilities” (Miner 248)に圧倒され母親として罪の意識を抱いている。一世の道德感は明治・大正時代のものである。<sup>1</sup> 彼女は、短篇“The Handkerchief”のBenjaminの母とは異なり、夫以外の男と一緒にいるために、子供を棄てることはできない。心のどこかにもう日本へは帰れないだろうという思いがあるが故に、Yamadaと関係を持ったのだと考えられる。しかし、そうすることで、日本への募る思いに歯止めをかけられたのである。

Sachikoが示す母への理解について、Stan Yogiは次のように指摘している。

That Sachiko matures and accepts the troubling events she has witnessed is suggested by the final line of the story, “it was a long long time before I could believe in God again.” This statement implies that Sachiko has come to terms with her mother’s frustration and her brother’s death because she can accept the concept of a force that orders events, no matter how painful. (Yogi 139)

ここで“God”は、Sachikoが母とKenjiの健康と無事を祈り続けていた“Buddha”(37)を意味している。アメリカにおける日本人農民の置かれた状況も分かったのである。心の中ですがり続けていた仏様が祈りに耳を傾けて下さらなかった

から、Kenji は亡くなったのだという解釈を示している。Sachiko の語りは、母への同情、共感によって支えられている。

## II

1959年に執筆された “And the Soul Shall Dance” は、初めてのアジア系アメリカ人作家の作品選集 *Aiiieeeee!: An Anthology of Asian American Writers* (1974)にも収められている。また、1970年代半ばに戯曲化され、劇場での上演だけでなく、PBS でテレビ放送もされている。これらを通じて多くのアメリカ人に、日系一世の “stoic and shamed emotional world” (Hongo 1)への理解をもたらしたことは、1980年代レーガン政権の時に、かつて強制収容された日系人への謝罪と賠償金をアメリカ政府から引き出す一つの大きな力となった。

短篇版と戯曲版の相違について、Yamauchi は次のように語っている。

I'd never written a play, didn't even like to read plays, but I'd worked out the plot years before, and only had to transfer the mood through dialogue—which was kind of tricky, because there's very little dialogue in the short story. Much of what happens is in the characters' heads, and I had to get it on paper. (Osborn 104)

短篇版で登場人物の心の中にとどめられていた思いを、戯曲版では、彼等に言葉で表現させたことを、明かしている。もう一つの大きな相違点は、短篇版では、日系アメリカ人二世の Masako が9歳の時に目撃したことが、大人になった彼女の視点から語られているということである。戯曲版では、日系一世の Oka 夫人の踊りと Masako によるその目撃の場面が最後になっており、Oka 夫人の死は削除されている。これが、第三の相違点である。ここでは、戯曲版に注意を払いながら短篇版を考察していく。

Oka 夫人は、酒を飲み煙草を吸うという伝統的な日本女性の規範から逸脱した行為のために、近隣の日本人から “strange” (21)と見なされている。Masako は、“Her taste for liquor and cigarettes was a step into the realm of men; unusual for a Japanese wife” (21)と語っている。しかし、Oka 氏の好意で、毎晩風呂を借りに一家で行った夏に、Oka 夫人を観察する。自分には、“Mrs. Oka loved her sake in the way my father and Mr. Oka loved theirs, the way I loved my candy” (21)と思え

たと語っている。子供の低い視線で捉え、偏見のない純真な心で判断している。蓄音機から流れてくる日本の曲に耳を傾けている Oka 夫人の、大きな少し虚ろな表情の目にたまったものを、日本への郷愁故の涙と、認識し得ている。Masako の母は、あくびか煙草の煙のせいとしか思っていない。

Oka 夫人は、小柄でやせていて、“pretty in spite of the boniness and the dull calico and the barren look” (20)であり、少女のような体型である。Masako 一家が来ても、姿を見せず、たまに出て来てもお茶の一杯も出さない。母は愛想がないと思っているが、Masako は“Obviously she was shy” (20)と感じ取っている。Oka 夫人は、内面においてもまだ少女のような純真さを失ってはいないのである。

また、飲酒や喫煙という男っぽい習慣にもかかわらず、Oka 夫人の秘められた女らしさをも、Masako は感じ取っている。彼女は、“the feminine in her was innate and never left her. Even in her disgrace she was a small broken sparrow, slightly floppy, too slowly enunciating her few words . . .” (21)と語っている。「かすかに羽をばたつかせ、ごくわずかな言葉をゆっくり発する傷ついた小さな雀」(“a small broken sparrow, slightly floppy, too slowly enunciating her few words”)という比喩は、Oka 夫人の本質そのものを表している。彼女も写真花嫁とあまり変わらない。Oka 氏の亡くなった妻の妹で、評判のよくない男とつきあっていたために、無理矢理別れさせられる。義兄との結婚が、立てられた代理人を通して決められ、後妻としてアメリカの Oka 氏の元へ送られたのである。戦前の日本の村落共同体の閉鎖性、因襲的な面、家長権の強さが窺える。家名を汚した娘を、父がアメリカへ追い払ったのである。家で預かっている Kiyoko の叔母に当たるから親子としてもうまくやっていけるだろうという理由付けを行っているが、娘の気持ちより世間体を優先したのである。貧しさのため、家の没落のため、写真花嫁となった女性は、自分を抑えながらもある程度納得して、アメリカへ渡ったのである。アメリカは、Oka 夫人にとっては、まさに「流刑地」(喜志 286)である。

Oka 夫人の褐色に日焼けした顔は、酷暑の日も日々畑で働いていることを物語っている。移住しては、開墾し畑作という繰り返して、日本の農家の嫁よりはるかに苛酷な労働を求められたのである。不作は、更にそれに拍車をかける。戯曲版において、Masako の父は、“Out here a man's horse is as important as his wife” (159)と言っている。農業を営んで行く上で、妻は馬と同じくらい重要

な働き手でなければならなかったのである。慣れない農作業にもかかわらず、Oka 夫人は精一杯働いていると捉えられる。

Oka 氏が船の三等切符を買って、やっと日本から呼び寄せた Kiyoko に Masako は落胆する。14歳にして “short, robust, buxom” (22) な体つきの彼女を見て、“nearly a woman” (22) と思っている。しぐさにも、大人の女性に近いものを感じ、Masako は率直に、自分の落胆した気持ちを語っている。

This was not a child, this was a woman. The smile pressed behind her fingers, the way of her nod, so brief, like my mother when father scolded her. The face was inscrutable, but something shrank visibly, like a piece of silk in water. I was disappointed. Kiyoko-san's soul was barricaded in her unenchanted appearance and the smile she fenced behind her fingers. (22)

大口を開け笑い声を立てるのは、はしたないと、母の実家で教わったのであろう。しかし、父親に見捨てられた子供と見なされいじめられていたという Oka 氏の言葉から察すると、Kiyoko は小学校を卒業するや家事手伝いをさせられていたと思われる。自分の立場をわきまえ、言いつけに素直に従ってきたことで、伝統的な日本女性の規範的振る舞いが、身に付いたのだと考えられる。自分を抑え表に出さない Kiyoko や Masako の母と、Oka 夫人は一見、対照的に思える。

Masako が Oka 夫人に惹かれる一方で、Kiyoko にとっての理想の母親像は、Masako の母であると捉えられる。たまにでも彼女が母のことを、“Always drinking and fighting” (23) と訴えられるのは、Masako の母だけだと思われる。冷たい風が吹く夜 Kiyoko を怯えさせ、素足にわらじ履きのまま Masako の家へ追いやったのは、Oka 夫婦の “drunken and savage brawling” (22) である。Oka 氏は、“slightly used bride” (21) にもかかわらず嫁としてもらってやったのだと思っている。戯曲版の二人の喧嘩の場面では、“Laugh! Give a *joro* another chance. Sure I'm stupid . . . dumb.” (178) と自嘲しながらも、恩着せがましさを出し、Oka 夫人を「女郎」と罵倒している。Masako 一家四人の前に座り彼等をじっと見ながら、Oka 夫人は殴られて顔にできた傷跡を隠もしない。暴力的な男であることを示し、彼に恥をかかせるのである。Oka 氏は、妻を従わせることができないが故に、夫として、男として劣等感を抱いており、世間に恥をさら



されたことで彼の劣等感、夫人への憤りはさらに強まる。Oka 夫人は、妻としての役割を果たすことを拒否しているのである。自分のためにさえ、料理をきちんと作ることをすらしていないと推察される。<sup>2</sup>

酒も煙草も Oka 氏との喧嘩でさえ、Oka 夫人にとっては、現実を忘れさせてくれる麻酔剤である。Masako は、“That her psychology may have demanded this anesthetic, that she lived with something unbearable, did not occur to me” (21)と語っている。彼女は、今もなお、日本にいる恋人を思い続けているのである。従って、彼女の逸脱行為は、Oka 氏に対して妻として、女として機能することへの精一杯の抵抗でもある。家長としての誇りが、彼女に対する振る舞いを横暴にする。しかし、この農場を出て生を営み日本へ帰るためのお金を貯める術は、彼女にはない。この内的生活においてももうおおいのない地で耐えて働くしかないのである。彼女の中で、日本への思い、恋人への思いが息づいているから、踏ん張って生きているのである。Kiyoko に“Endure” (72)と言う Masako の母の偏頭痛は、従順な妻を演じながらも夫の横暴さに耐えられなくなることがあることを物語っている。我慢は、一世が日本で教わった美德である。<sup>3</sup> Masako は、両親や Oka 夫婦を見て、日本の夫婦関係がどのようなものなのか悟っていったのだと思われる。

卑小な低木や雑草が点在する夜の砂漠が、月光という魔法に照らされて舞台に変容するのを Masako は、目撃する。その舞台で堂々と、且つしなやかに舞うのは Oka 夫人である。ポピーや桜草を摘んでブーケにし、その小さな花束を持って彼女が歌いながら舞う姿に、見入ってしまう。

Akai kuchibiru	Red lips
Kappu ni yosete	Press against a glass
Aoi sake nomya	Drink the green wine
Kokoro ga odoru	And the soul shall dance (24)

ブーケを持った手を向こうへやり、そっとブーケに目をやり、まぶたを閉じ気味にして踊り出すという所作は、日本舞踊を思わせる。歌詞からすると、西洋風の踊りと想像することもできる。グラスに触れる赤いルージュの唇、リキュールに酔う舌は、熱く燃えるような触感を連想させる。舞いながら、恋人と唇を重ねた瞬間の胸のときめき、熱い思いを再体験していると感じられる。

回るのが基本の舞いであれ、彼女の中では、心が飛び跳ねているのである。恋人への思いに身を委ねている時は、束縛感、抑圧感から解放され、彼に向かって心の鼓動が速まるのである。Yogi は、“Dance, however, also implies the control of mind over body—the body executing the mind’s visions” (Yogi 134)と述べている。心がイメージする通りに舞っている/踊っているこの時が、心と体のバランスが取れていたぎりぎりの最後の瞬間である。Masako は、最後に耳にした “Falling, falling, petals on a wind . . .” (24)が Oka 夫人の運命だったと理解していると思われる。風に舞いながら最後の輝きを放って異郷に散ったのである。<sup>4</sup> Masako は、彼女の恋人への一途な思いに、結晶化した純真な思いの中に、少女と女らしさを持った女性の面影を確認していると考えられる。

### III

日系二世は、両親が苦しめられた排日感情、白人の黄色人種に対する差別意識を、肌で感じることになる。日本軍による真珠湾奇襲攻撃の数ヶ月後の1942年2月 Franklin D. Roosevelt 大統領の行政命令により、日本人・日系人は砂漠地帯の収容所へ送られる。有刺鉄線で囲まれたバラック造りの建物の中へ押し込まれる。帰化不能外国人と見なされていた一世だけでなく、市民権を持っている二世までもが「敵性外国人」(“enemy alien”)として扱われたのである。彼等に強いられた苛酷な生活が、アメリカ白人の、知的、文化的に劣っているだけでなく道徳的にも劣っていると見なす日本人に対する差別的視線を逆照射する。<sup>5</sup> 日系二世は排日感情、差別意識を肌で感じることで、外国人土地法がいかに一世を苦しめたのか実感できたのである。

1943年2月、収容されている17歳以上の日本人・日系人に対し忠誠登録質問がなされる。アメリカ軍に入隊し、命令されれば、いかなる戦闘任務にも就きますかという、男性に対してなされた27番目の質問、アメリカに無条件の忠誠を誓い、日本国天皇や、他の国の政府や権力組織への忠誠を拒否しますかという28番目の質問は、アイデンティティにかかわる質問である。それは、John Okada の *No-No Boy* (1957)に描かれているように、一世と二世との間に亀裂を作るだけでなく、兄弟を敵同士にさえる。主人公 Ichiro Yamada が、どちらの質問にも「ノー」と答えのは、母の影響のためではないかと思うほど、彼女の故国への思いは強い。日本の敗北が信じられず、事実であると悟っても受け入れられず、彼女は自殺する。Kibei 以外の二世にとって、日本は想像力で作

り上げたイメージである。しかし、その幻想を突き破るような一世の日本への思いの強さを、実感せざるを得なかったのである。

両親の苦悩と苦勞、日本への思いが身に染みて分かった時、母の、妻としての、母親としての、女としての気持ちを理解できたのである。Oka 夫人と Masako の関係も、疑似的親子関係として捉えられる。遠い過去から聞こえてくる母の声を、娘達は、母の思いが籠もっているから、歌として受け止め、共感を籠めて語るのである。共感を持って母の物語を語ることで、耐えて生きることの意味が次世代の女達に伝われば、日系アメリカ人の起源神話に刻み込まれた母の足跡が可視化される可能性も生まれる。母の歌は、娘へのメッセージを宿した歌であり、母と娘との絆である。

#### Notes

1. 母性愛は、本能的に女性に備わっているのではなく、文化的、社会的構築物である。(山田 81-84, 109-111)
2. 戯曲版において、Masako の母は Kiyoko に、“And take care of yourself. You owe that to yourself. Eat. Keep well. It'll be better, you'll see. And sometimes it'll seem worse. But you'll survive. We do, you know.”(193)と忠告している。そして、Oka 夫人に関して、Masako に“*She has nothing to live on but memories.*” (175)と語っている。
3. 喜志雅之は、「日系アメリカ移民が苦難の生活を生き抜く哲学として「しかたがない」と「がまん」は、アメリカの日系社会、日系農業共同体＝スモールタウンに移植された文化的価値観だった」と述べている。(喜志 305)
4. 1930年代、日本の貧しい農民が移民をして行ったブラジルで半年間を過ごした石川達三は、『蒼氓』(1935)において、「移民と言うものは、こりゃ、まあ、落葉あみた様なもんじゃと思うとりますわい」(石川 24)と書いている。
5. 西洋が東洋に向けた視線に関しては、Edward Said 著、*Orientalism* (1978)に詳しい。

#### Woks Cited and Consulted

Holliday, Shawn. “And the Soul Shall Dance: Thomas Wolfe’s influence on Wakako

Yamauchi.” *Thomas Wolfe Review, Annual 2007*.

Hongo, Garrett. “Introduction.” *Songs My Mother Taught Me: Stories, Plays and Memoir*. Ed. Garrett Hongo. New York: The Feminist Press at The City University of New York, 1994. 1-16.

Miner, Valerie. “Afterward: The Relocation of Identity” *Songs My Mother Taught Me*. Ed. Garrett Hongo. New York: The Feminist P of the City U of New York, 1994. 245-254.

Okada, John. *No-No Boy*. Seattle and London: U of Washington P, 1957.

Osborn, William P. “A *Mellus* Interview: Wakako Yamauchi.” *Mellus*. 23.2. (Summer 1998). 101-110.

Osumi, M. Dick. “Jungian and Mythological Patterns in Wakako Yamauchi’s “And the Soul Shall Dance.” *Amerasia Journal*. 27.1. (2001). 87-96.

Said, Edward W. *Orientalism*. London: Routledge & Kegan Paul, 1978. 『オリエンタリズム』上・下 今沢紀子訳 東京：平凡社, 1993年。

Sumida, Stephan H. “And the Soul Shall Dance by Wakako Yamauchi.”

*A Resource Guide to Asian American Literature*. Ed. Sau-ling Cynthia Wong and Stephan H. Sumida. New York: Modern Language Association of America, 2001. 221-232.

Yamauchi, Wakako. *Songs My Mother Taught Me*. New York: The Feminist P of the City U of New York, 1994. (本作品からの引用は、本文中で括弧内で頁数のみを示す)

Yogi, Stan. “Revels and Heroines: Subversive Narrative in the Stories of Wakako Yamauchi and Hisaye Yamamoto.” *Reading the Literatures of Asian America*. Ed. Shirley Geok-lin Lim and Amy Ling. Philadelphia: Temple U P, 1992. 131-150.

アジア系アメリカ文学研究会編 『アジア系アメリカ文学—記憶と創造』 大阪：大阪教育図書, 2001年。

池野みさお「写真花嫁のトラウマ—日系アメリカ人—世の女性像」『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』 東京：金星堂, 2014年。

石川達三「蒼氓」『石川達三作品集』第一巻 東京：新潮社, 1972年。

植木照代『日系アメリカ文学—三世代の軌跡を読む』 大阪：創元社, 1997年。

喜志雅之 「もうひとつのスマールタウン—日系アメリカ演劇が映し出す「記

- 憶の町」の妻たち』『スモールタウン・アメリカ』東京：英宝社, 2003年。
- 瀧田佳子 「心は踊る—アジア系アメリカ文学と狂気」『アメリカ太平洋研究』第2巻(2002年) 35-42頁。
- 多民族研究学会編 『エスニック研究のフロンティア』東京：金星堂, 2014年。
- 古木圭子 「Wakako Yamauchi の *And the Soul Shall Dance, The Music Lessons* における「日本的」イメージと一世女性のセクシュアリティ」『高知女子大学 文化論叢』第5号(2003年) 18-30頁。
- 松尾直美 「「少女」の視点から見る記憶の物語」 *KASUMIGAOKA REVIEW* 第12号(2006年) 1-14頁。
- 山本茂美 「日系アメリカ文学におけるある劇作家の意図について—Wakako Yamauchi の作品を通じて」『金城学院大学論集 人文科学編』第1巻第1・2合併号(2005年) 112-120頁。
- 山田昌弘 『近代家族のゆくえ』東京：新曜社, 1994年。